

聖書：マタイ 12：9～21

説教題：彼の名に望みを

日時：2019年6月2日（朝拝）

安息日論争の第2弾です。前回の12章1～6節ではイエス様の弟子たちが安息日に空腹のため、麦畑に入って穂を摘んで食べた様子を見て、パリサイ人たちが「安息日にしてはならないことをした！」と非難しました。一切仕事をしてはならない日にあなたの弟子たちはそれをしている！と。イエス様はその彼らに対して、彼らの律法解釈と適用は間違っていることを示されました。今日の9節以降は、同じ論争の第二ラウンドとなります。

イエス様が会堂に入ると、そこに片手の萎えた人がいました。パリサイ人たちにとっては格好の材料です。彼らはイエス様にはこの人を癒やすことができるし、きっとそうするだろうという確信がありました。そこで質問します。「安息日に癒やすのは律法にかなっていますか。」と。これは真理を知りたいからではなく、イエス様を訴えるためだったと10節に記されています。パリサイ人たちの基本スタンスは、もちろんこの日に癒やしを行ってはならないというものでした。ただ命が危険にさらされている時は別です。そのまま放置すればその人が死んでしまうような場合は例外です。そこまではさすがに禁止しません。しかしこの時の片手の萎えた人の場合は明日まで待っても全然問題は無い。安息日にそれをしなければならぬ理由はない。果たしてイエス様はどうするのかということなのです。

これに対してイエス様は言われました。11節：「あなたがたのうちのだれかが羊を一匹持っていて、もしその羊が安息日に穴に落ちたら、それをつかんで引き上げてやらないでしょうか。」イエス様はここで彼らの日常の行動に訴えています。もし一匹しかない自分の羊が穴に落ちたらどうするか。今日は安息日だからと言って助けてやらないということがあるだろうか。羊がメーメー泣いているのに、明日までは生きるだろうからと言って、そのままにしておくだろうか。そうはしないだろう。むしろかわいそうに思って急いで助けるのではないか。だとしたら人間は羊よりもっと価値ある存在だから、当然助けるべきではないか。そのように仰っています。パリサイ人たちは公式的には安息日にはどんな仕事もしてはならないとしつつも、自分の羊が穴に落ちた時には助けていたのでしょうか。それは一貫していない。矛盾している。その点をイエス様は突か

れたのです。

そしてイエス様は「安息日に良いことをするのは律法にかなっていません」と言われました。そう言って後、手の萎えた人に向かって「手を伸ばしなさい」と言って直されました。これを見てパリサイ人たちは出て行って、どうやってイエスを殺そうかと相談し始めた、とあります。律法をどこまでも守るべきだ！と主張する彼らが、人を殺すという律法に全く反する行動を一緒になって企むことへ進んで行ったのです。

さて私たちはこの記事からも改めて7節の御言葉を味わいます。イエス様は7節で「わたしが喜びとするのは真実の愛、いけにえではない」というホセア書の言葉を引用されました。「真実の愛」とは私たちの内面の思いを表し、「いけにえ」とは外側に見える儀式のことです。本来この両者はセットで考えられるべきものです。しかし往々にして私たちは外側の儀式にのみ満足して、真に大切な真実の愛（あるいは「あわれみ」）を軽んじてしまいがち。そんな私たちに対して神はご自身が真に喜ぶのは真実の愛の方だ！と言っておられるわけです。これを抜きにした外側だけの儀式や規則は、神の前に何の意味もない、と。安息日はもちろん休む日として与えられて来ました。六日間の働きから手を休めて、この日を取り分け、神礼拝にこそ向かう日であると。それは私たち人間存在にとって欠かせない日です。神との交わりを通して、いのちを新しく満たして頂く日です。しかしだからと言って、一切手足を動かさず、困っている人がいてもあわれむべきでないというのではない。神の憐れみを豊かに経験し、感謝している者たちとして、その神の憐れみがさらに他の人々に豊かに注がれるために自分を用いるのにふさわしい日でもあるのです。バランスは必要だと思います。礼拝に十分に心を注ぐことなしに、ただあわれみの奉仕にだけ没頭するのが良いわけではありません。しかし神を礼拝するとともに、その憐れみがさらに人々の間に広がるために適切に自らをささげるのは御心にかなうことです。そういう意味でイエス様は「安息日に良いことをするのは律法にかなっていません」と言われました。私たちはその観点から改めて自分の聖日の過ごし方を考え直してみたいと思います。イエス様はあえて安息日にあわれみのわざのために働かれました。私たちは安息日の主なるイエス様に教えられて、このイエス様の心を映し出すような安息日のあり方を考えさせられたいと思います。

さてイエス様は15節で、この場を立ち去られました。それはパリサイ人たちの殺害計画を知ってでした。その姿は一見弱々しくも思えます。逃げるようなまねはせず戦え

ば良かったのではないか。パリサイ人らをのさばらせておかず、神の子の権威で撃退すれば良かったのではないかと思うかもしれません。その場を去ったイエス様の後には大勢の群衆がついて来ました。今、会堂で癒やされた人を見て、自分も直していただきたいと思う人がたくさんついて来たのでしょう。イエス様はその人々を皆癒やされました。助けを必要としている人々を皆あわれんでくださったイエス様のお姿があります。イエス様はその彼らに、ご自分のことを人々に知らせないように！と言われました。マタイはこのようなイエス様の姿を指して、17節以降で、これはイザヤを通して語られたことが成就するためだったと述べてイザヤ書42章1～4節を引用します。つまり今日見ているイエス様のお姿、特に今見た15～16節のお姿には、イザヤの預言に照らして非常に重要な意味があるということです。

そのイザヤ書42章。いわゆる主のしもべについて語られ始めるスタートの章です。そこに言われていることは、神がやがて遣わすメシヤは「しもべなるメシヤ」であるということです。普通私たちはメシヤ・救い主と言うと、どんな方を想像するでしょうか。期待するのは力強いメシヤ。圧倒的な力を持ち、敵をその力でねじ伏せ、勝ち誇るメシヤ、栄光に輝くメシヤ。しかしイザヤ書42章から預言されて行くのは、神が与えるメシヤはしもべなる方であるということ、仕える方であるということです。その方は確かに神と特別な関係にあります。ここにあるように、その方は神に選ばれた方、神に喜ばれている方、神に愛されている方、神に特別に聖霊を注がれた方です。そしてこの方は「異邦人にさばきを告げる」とあります。異邦人にさばき！というと、彼らが断罪されるという悪い意味を思い浮かべるかもしれませんが、そうでないことは21節を見ると分かります。そこに異邦人はこの方に望みをかけるとあります。ですからこれは異邦人が裁かれるという意味ではありません。この「さばき」という言葉は「正義」という意味です。第3版までは「公義」と訳されていました。神の御心にかなっていない状態にあるものを神の御心に完全にかなった状態にすることです。約束のメシヤは異邦人にもこの祝福をもたらします。メシヤは全世界の人々にその祝福をもたらす方であることが旧約聖書からきちんと言われていたことを私たちは改めて知ります。

そのメシヤについてこのイザヤ書42章は何を言っているのでしょうか。19節に「彼は言い争わず、叫ばず」とあります。私たちの間で国のリーダーとなる人あるいは国々のリーダーとなる人としてどんな人をイメージするのでしょうか。それは力強い性格の人ではないのでしょうか。自分がやろうとしていることを貫くために、それを妨げる人とは言

い争う人。言い負けない人。強力に相手を打ち負かし、大声で叫ぶ人。大きい声を出した方が勝ち。その線に沿うなら、イエス様もここでパリサイ人たちともっと張り合い、屈服させる方が良かったかもしれません。しかし神のしもべはそういう道は行かないのです。イエス様はここで黙って脇へ退かれました。自分の重要性をアピールするために争ったり、叫ぶことをしない。その声を聞く者もないほどです。16節でご自分のことを人々に知らせないように！と言われたのも、このことと一致します。イエス様はご自分の奇跡が人々の間に評判になり、それで自分が高く持ち上げられることを望まない。しもべは低い道に行くのみです。

そして20節に「傷んだ葦を折ることもなく、くすぶる灯芯を消すこともない。」とあります。葦は湿地にたくさん生えています。それは笛にしたり、物差しとして使ったり、ペンにしたり、色々な使い方ができます。いずれにせよ傷んでいない葦の方が使い勝手が良い。替えはいくらでもあります。安価です。ですから傷んだ葦には見向きもしませんし、使っている最中に傷んだら、さっさと折って捨ててしまえ！となります。しかしイザヤ書で預言されてきたメシヤなるイエス様はそうされない。傷んだ葦にたとえられるような者をもなおあわれみ、大事にする。それを折れ！とは言わないのです。もう一つのくすぶる灯芯も同じです。本来あかりとなって周りを照らすことが期待されているのに、光が出ない。役に立たない。くすぶって煙いだけ。こんな役立たずの灯芯なんかもみ消してしまえ！捨ててしまえ！とするのが普通でしょう。しかしメシヤなるイエス様はそうしない。そんな暴力的なことはしない。むしろ忍耐をもってなお関わってくださる。そればかりか「さばきを勝利に導くまで」とあります。簡単に言えば、今見たような者たちをやがて必ず勝利に導いてくださるということです。先に見たように、この「さばき」とは神の御心が完全に実現された状態のことです。神がご計画くださった最後の状態のことです。一体どのようにして、メシヤはその勝利へとあわれな者たちを導くことができるのでしょうか。それはこの方が私たちのためにしもべとして歩むことによってというのがイザヤのメッセージです。ここで引用されているイザヤ書42章は、主のしもべに関する預言の始まりの部分だと先に申し上げました。そのしもべはその後、どのような歩みをたどるとイザヤ書で語られているのでしょうか。その頂点はあのイザヤ書53章の「苦難のしもべ」のお姿です。そこではこのしもべが自分のいのちさえも身代わりに差し出して、多くの人を救い出すことが預言されています。イザヤ書53章4～6節：「まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みを担った。それなのに、私たちは思った。神に罰せられ、打たれ、苦しめられたのだと。しかし、彼は私たちの背き

のために刺され、私たちの咎のために砕かれたのだ。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、その打ち傷のゆえに、私たちは癒やされた。私たちはみな、羊のようにさまよい、それぞれ自分勝手な道に向かって行った。しかし、主は私たちすべての者の咎を彼に負わせた。」 12 節後半：「彼は多くの人の罪を負い、背いた者たちのために、とりなしをする。」 イエス様はまさにイザヤが預言する苦難のしもべとして仕える道を進み、ついにはご自身のいのちさえも捨てます。その尊い代価を払って、救われるに値しない者たちを勝利へ導くのです。そのような主のしもべとして、イエス様は今日の箇所でも言い争わず、叫ばず、へりくだって低い道を進んでおられたのです。パリサイ人と争わずに陰に退き、ご自分のことについて誰にも言うなと言われた。このお姿の中に、マタイはイザヤ書が預言する主のしもべそのものの姿がある、あの預言がこうして成就していると言っているのです。

最後の 21 節に「異邦人は彼の名に望みをかける」とあります。この救いにあずかることができるのはイスラエル人だけではありません。すべての人がこの救いに招かれています。やがてこの福音書は最後の 28 章で、全世界への大宣教命令を記します。その全世界に対する関心がすでにここにあります。どんな人でもこのメシヤに望みをかけて良いのですし、またそうするようにと招かれています。

さて私たちは自分をどう考えているのでしょうか。自分は傷んだ葦のような者でしょうか。くすぶる灯芯のような者でしょうか。人間の間では自分をそのように認めたら終わりかもしれません。負け組のレッテルを貼られて、この世のサバイバルゲームを生きていくことはできない。ですからむしろ自分はさも立派な葦であるかのように、あるいは光を放つ灯芯であるかのように振舞わなくてはならない。しかし神の前で考えるならどうでしょうか。私たちは全員、傷んだ葦ではないのでしょうか。くすぶる灯芯そのものではないのでしょうか。替えはいくらでもあると言われて捨てられて当然の者たちです。お前なんか役には立たないと言われ、こんな傷んだ葦なんか折ってしまえ！くすぶる灯芯なんかもみ消してしまえ！と言われてもおかしくありません。しかしそんな私たちにとっての良い知らせは、イエス様は傷んだ葦を折ることもなく、くすぶる灯芯を消すこともないお方であること。11 章 28 節からの部分で見たように、イエス様は心が柔和でへりくだっているお方です。すべて疲れた人、重荷を負っている人はわたしのもとに来なさい、と招いているお方です。その方のもとに行く者には、たとえ傷んだ葦のような者であっても、くすぶる灯芯のような者であっても、将来に素晴らしい勝利が備えられて

います。イエス様はしもべとしての歩みを通して、やがての十字架のみわざを通して、この信じられないような素晴らしい将来をより頼む者たちにもたらしてくださる。異邦人もこの方に望みをかけて良いのです。すべての人がこのしもべなるメシヤに信頼するようにと招かれています。私たちもその一人とさせられたいと思います。このイエス様によって、ついに約束された勝利へと至る恵みの道、救いの道を歩ませていただきたいのです。